

骨盤臓器脱手術前後における 排便に関する症状の実態調査



亀田メディカルセンター
ウロギネコロジーセンター
三輪幸、野村昌良、右田雅子
堀新平、三輪好生、平川倫恵
高橋知子、岩谷泰江
神山剛一、清水幸子

第20回日本排尿機能学会 COI開示

筆頭発表演者名 : 三輪幸

私は今回の演題に関連して、
開示すべきCOIはありません。

背景

- 骨盤臓器脱(pelvic organ prolapse: POP)患者は様々な下部尿路症状を呈することが知られているが、同時に排便困難や残便感などの排便症状を訴える患者も多数みられる。
- 近年POPに対して経膣的メッシュ(transvaginal mesh: TVM)手術が普及している。このTVM手術において後膣壁下に挿入されたメッシュは直腸壁を面でサポートする。
- 欧米におけるキットを用いたTVM手術により排便症状が改善するという報告は散見される。(Wetta LA et al. Int Urogynecol J 2009, Khandwala Int Urogynecol J 2011)
- 一方、本邦におけるPOP患者の排便症状の状況およびTVM手術のより変化についてはほとんど知られていない。

目的

今回我々は質問表を用いて、TVM手術前後における排便に関する症状の変化に関する調査を行った。

対象

2011年4月から2012年12月までの間に、当院ウロギネコロジーセンターにおいて骨盤臓器脱に対し、後膣壁を含む経膣メッシュ手術(TVM-AP, TVM-C)を施行した59例を対象とした。

患者背景として、平均年齢は67(36-84)歳、平均出産回数は2.2(1-4)回、BMIの中央値は25(18.7-35.1)であった。

方法

- 排便症状の評価は、独自で作成したPelvic Floor Distress Inventory(PFDI)-20の日本語版を用いた。
- 排便に関わる症状の質問であるQ7-14を用い、手術前と術後2か月および6か月における症状の変化の検討した。

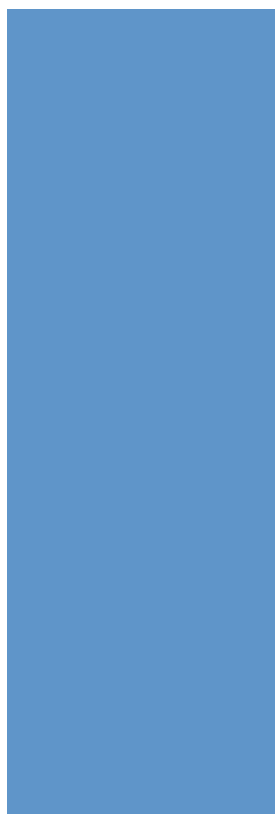
PFDI-20の排便に関する質問(Q7-14)

		ない	ある			
			困らない	少し困る	中くらい困る	かなり困る
7	排便のために強いいきむ必要があると感じますか？		いきみ			
8	排便後、便を完全に出し切れていない感じがありますか？		残便感			
9	あなたの便が有形便であるときに、コントロールできずに便がもれてしまうことがありますか？		便失禁(有形便)			
10	あなたの便がやわらかいときに、コントロールできずに便がもれてしまうことがありますか？		便失禁(軟便)			
11	普段、コントロールできずにおならをもらすことがありますか？		ガス失禁			
12	排便のときにいたみがありますか？		排便痛			
13	急に起こる我慢できないような便意をもよおしてトイレに駆け込むようなことがありますか？		便意切迫感			
14	排便の途中あるいは後で腸の一部が脱出したり、外にふくらんでくることがありますか？		膨瘤感・脱出感			

結果1: なんらかの排便症状を有していた患者の割合

■ 術前 ■ 術後2ヶ月 ■ 術後6ヶ月

93%



84%



74%

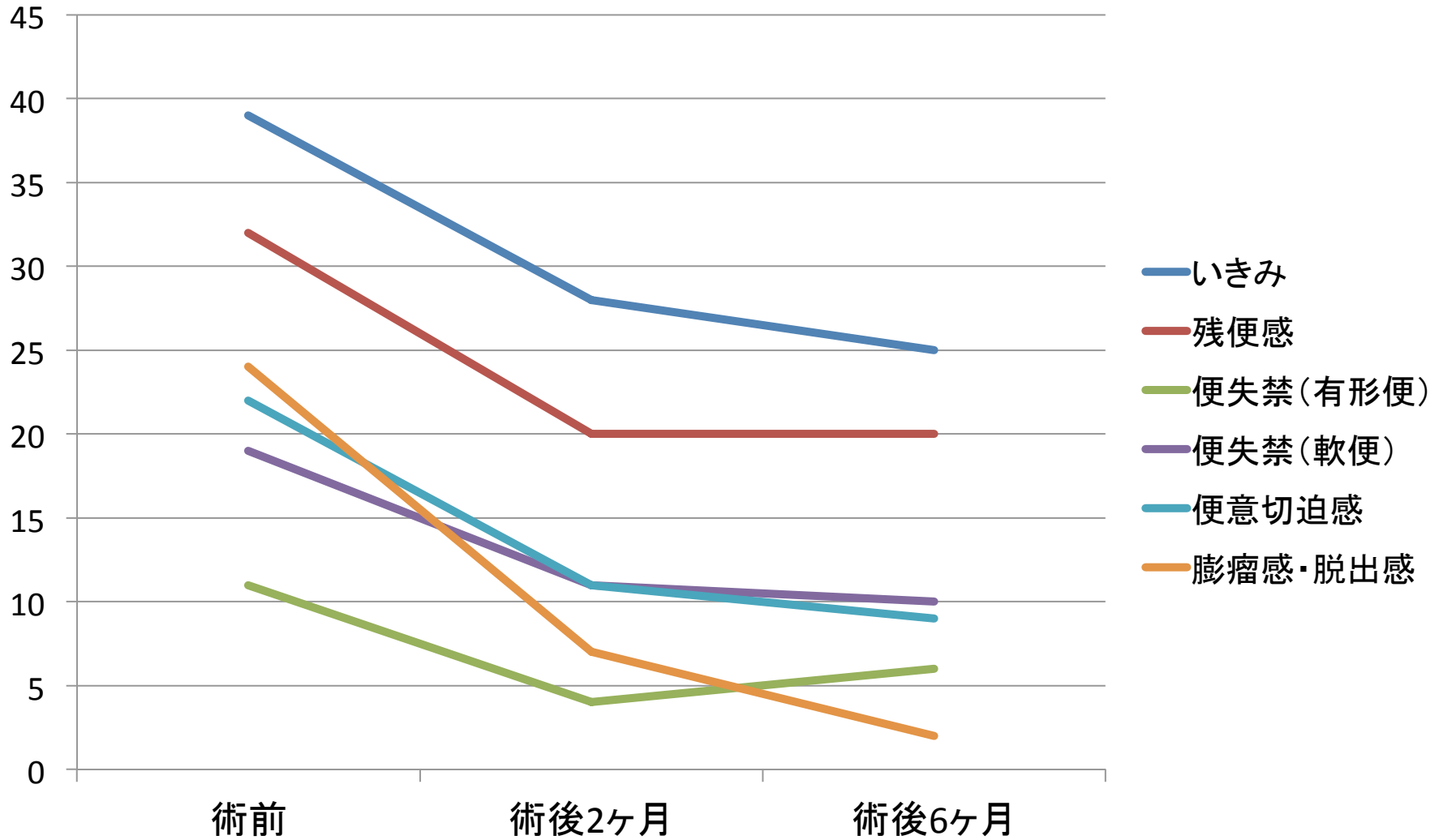


結果2: 排便症状の変化

		術前	術後2ヶ月	術後6ヶ月
7	いきみ	39	28*	25**
8	残便感	32	20**	20**
9	便失禁(有形便)	11	4*	6*
10	便失禁(軟便)	19	11*	10*
11	ガス失禁	29	25	23
12	排便痛	14	10	5*
13	便意切迫感	22	11*	9**
14	膨満感・脱出感	24	7**	2**

* P<0.05 vs 術前、** P<0.01 vs 術前

結果2: 排便症状の変化



結果のまとめ

- PFDIにおいて何らかの排便に関する症状を訴えた患者の割合は術前93%であった。術後2ヶ月目で84%、術後6ヶ月目で74%と減少した。
- 術前と比較し、術後6カ月において排便時の強いいきみ(Q7)・残便感(Q8)・便失禁(Q9,10)便意切迫感(Q13)・排便時の腸の脱出や膨隆感(Q14)において有意な改善を認めた。

考察

- POP患者において術前に排便症状を有する患者が極めて多いことを明らかにした。
- 膣後壁修復を含むTVM術後に排便障害、便失禁、便意切迫感に関する自覚症状の改善を認めるも、それら症状は完全に消失するのではなく、残存することもわかった。
- 一方、膨瘤感・脱出感は著名に改善した
- 手術を予定しているPOP患者に対して、排便症状の術後の変化に関して十分にインフォームドコンセントを行う必要があると考えられた。

本研究の問題点と今後の展望

- 本研究の問題点は、質問表による主観的な排便症状の評価のみであったこと、およびコントロール群が設定されておらず、単一群の手術前後の比較であったことである。さらにPFDI-20のvalidationされた日本語版はなく、独自で作成した質問表を用いたことも問題点である。
- 今後は排便造影および直腸内圧検査などを行い、客観的指標が症状改善の有無を予測可能かについても検討したい。

結語

- 今回、TVM手術前後における排便に関する症状の変化を調べた。
- 術前に排便症状を有するPOP患者は極めて多いこと、術後に排便症状は改善するも残存することが多いことを明らかにした。